

Authentic language use と EFL/ESL 教科書に見られる Requests の比較研究

広島大学

深 沢 清 治

1 はじめに

言語学習においては、音声、文法、語順、語彙の習得に加えて、それらの言語材料を場面や状況に合わせて適切に使用することを学ぶことが必要である。文法的であるということが必ずしもコミュニケーション上の成功を保証するものではない。たとえば次のような電話での対話場面において、A からかかってきた電話に対する B の答えは場面での適切さという点から不完全である。

A: Is Josh there?

B: Yes. (silence)

B に求められているのは A からの情報要求に応えるだけでなく、求められた人物を電話口に連れて来ることである。このような例から、コミュニケーション能力は遭遇した場面で人間関係に合った適切なやりとりを行う *interactional competence* (相互作用能力) であり、個々の場面で相手とのそれまでの人間関係を基盤にした対人関係調整能力であるとも言えることができるであろう。

第 2 言語における *speech acts* の研究は *request*, *apology*, *refusal*, *compliment* などの行為を実現する際に、どのような言語材料が利用できるのか、あるいは母語話者と非母語話者が *speech act* を実現する際にどのような文化差が生じて、理解・表現においてどのように影響を及ぼすかを研究する分野である (Gass & Selinker 2001)。教室という環境でしか入力のない EFL 学習者にとって唯一の入力源である教科書には自然でかつ多様な用法を多量に提示することが求められる。

本研究の目的は、適切な言語使用のためのモデルを提示する英語教材の役割に着目し、EFL/ESL 教材が英語母語話者による自然な言語使用とどのように異なるのか、*request* という *speech act* に限定して比較研究を行うことにある。

2 先行研究

(1) 近年の ILP の動向

異文化語用論 (*Cross-cultural pragmatics*) の研究は第二言語習得研究の中で 1990 年代以降、大きな展開を見せている。第 1 に、従来の研究が目標言語の母語話者と非母語話者の言語使用上の *pragmatic use* における相違点を記述、比較・分析したものであったのに対し、異文化語用論においても中間言語音韻論、中間言語統語論などと同様に文化背景の異なる学習者の語用論的知識・技能の習得過程における *pragmatic development* に注目した *Interlanguage Pragmatics (ILP)* 研究に焦点が移行しつつある (Wolfson 1989; Cohen 1996; Kasper & Schmidt 1996; Kasper 1997)。

第 2 の動きは、母語話者の言語的直観を総合した研究に対して、*Authentic discourse* から *RP*, *DCT*, *Think-aloud protocol* などの研究方法の開発により、実験的手法を導入したデータに基づく研究への推移である (Kasper 2000)。

第 3 の流れは、従来の丁寧さ研究のようにある言語機能を表す表現のもつ *formality/informality*

の階層性の研究から、ある speech act (apology, request など) の理解および表現場面において、発話に対して相手がどのような感情を持つのか (perception)、あるいは相手の社会的地位、年齢、親密度などの人間関係に応じてどのように表現を使い分けるのか (production)、など、言語使用の相違へと関心が分化している。

(2) 日本人の EFL/ESL 学習者の request realization の研究

日本人英語学習者を対象とした主な研究は以下表 1 のようにまとめられる。

表 1 日本人の EFL/ESL 学習者の request realization の研究

Study	Instrument
Tanaka & Kawade (1982)	Multiple Choice
Tanaka (1988)	Role play
Takahashi & DuFon (1989)	Open-ended role play
Kitao (1990)	10 point scale perception
Fukushima (1990)	DCT
White (1993)	Observation
Niki & Tajika (1994)	Discourse completion questionnaire
Takahashi (1996)	Rating scale
Hill (1997)	DCT

これらの研究から、日本人英語学習者の要求実現行動の特徴は次のようにまとめることができる。

- 英語力の増加とともに、より母語話者に近い要求方略が使用できるようになり、さらに周辺的な表現、たとえば down-grader ('I just wanted to call you.' の下線部) も使うようになる。
- 日本人は相手との親密度に応じて要求表現の丁寧度を変えることがある。
- 日本人は英語母語話者に比べて、より直接的な要求表現を使うことがあり、丁寧さにおいて適切さに欠けることがある。
- 海外での滞在期間が長くなれば、より母語話者の表現に近くなる。
- 大人の学習者は語用論規則を知識としては持っていますが、実際にそれを使うわけではない。

EFL 教室環境にいる日本人学習者にとって、語用論的入力機会や社会言語学的ニーズは量的・質的にも不足している。さらに、語用論的能力の習得において、教師によるメタ語用論的規則の説明を通じた明示的教授が成功要因となっているとする研究 (Olshtain & Cohen 1990) から、教授手段となる教科書を初めとする教材は、語用論的能力の養成には極めて重要な役割を持つものと考えられる。

では、教科書は言語材料入力源としてだけでなく、語用論的能力養成のための必要、十分、かつ適切な入力源となっているのだろうか。そこで、本研究では以下の 2 つの研究課題を掲げる。

- ① 母語話者による自然な英語の会話と、ESL/EFL 教科書中の会話に表れる要求表現には違いがあるか。
- ② 英語圏で作成された ESL 会話教材と、日本で使用されている EFL 会話教材に表れる要求表現には違いがあるか。

3 教科書分析

自然な言語データを教授モデルとして利用することの必要性和可能性は論を待たない (Scotton & Bernsten 1988; Wall 1990)。英語母語話者と英語非母語話者 (上級学習者大学院生) の要求表現の比較を行った Schmidt (1994)によれば、同一の場面状況においても、上級学習者と母語話者の用いる要求表現のタイプは異なることが報告されている。さらに、データに基づく研究から、自然な英語使用と ESL 教科書の要求表現には重要な食い違いが存在するという。

日本の高等学校オーラルコミュニケーション A 教科書に表れた speech acts の種類と分布に関する前研究において、分析教科書においては提示される speech acts の種類は限定されており、さらにその中で最も出現頻度の高いのは要求表現であった (深沢 2000)。量的分析に加えて、日本の高校生英語学習者が使用している教科書の要求表現例は、自然な英語使用、さらには ESL 教科書の用例とどのように比較されるのかを以下で分析する。

(1) 分析資料

自然な英語使用、さらには ESL/EFL 教科書の調査資料として以下のものを使用し、要求表現を抽出して三者間の相互比較分析を行った。

- a) Authentic, natural language data (Scotton & Bernsten 1988; Wall 1990; Schmidt 1994)
- b) ESL textbooks (Schmidt 1994 を援用)
- c) EFL textbooks (日本の高等学校オーラルコミュニケーション A 教科書 9 冊)

(2) 分析方法

要求を行う場合、いきなり要求表現を使うよりは、相手に対して何らかの前置きをしたり、相手に対しての負担を少なくしたりするのが一般的であるため、分析に際しては、要求表現を含む 1 文のみでなく、要求の前段階や前後関係を含めた sequential interaction に着目した。まず、直接・間接要求表現の分類方法として、Ervin-Tripp (1976), Scotton & Bernsten (1988)らの以下のようなカテゴリーを利用した。

● Directive types (Ervin-Tripp 1976; Scotton & Bernsten 1988)

1. Needs statements -- e.g., "I need X." ; "I want to X."
2. Mitigated need statements -- e.g., "I would like "
3. Imperative -- e.g., "A pen."
4. Imbedded imperative -- e.g., "Could you X?"; "Why don't you X?"
5. Permission directive -- e.g., "May I have X?"; "Can I have X?"
6. Question directives -- e.g., "Is there X?"; "Do you have X?"; "You don't happen to have X, do you?"
7. Hints -- e.g., "I'm leaving at 2:00." (= Hurry up!)

また、要求は単一の発話のみで完成するのではなく、文を越えた発話レベルで行われる。そして要求を含んだ状況が相手に不快な気持ちを起こさせないように、いくつかの補修方略を設定するのが一般的である。要求方略タイプ作成において、Blum-Kulka & Olshtain (1984)は要求表現に際して、次のような補修方略を設定しており、要求表現の前後表現についてはこれを利用した。

● External modifications (Blum-Kulka & Olshtain 1984)

1. Checking on availability -- "Are you going in the direction of the town? And if so, is it possible to join you?"
2. Getting a precommitment -- "Will you do me a favor? Could you lend me your notes for a few days?"

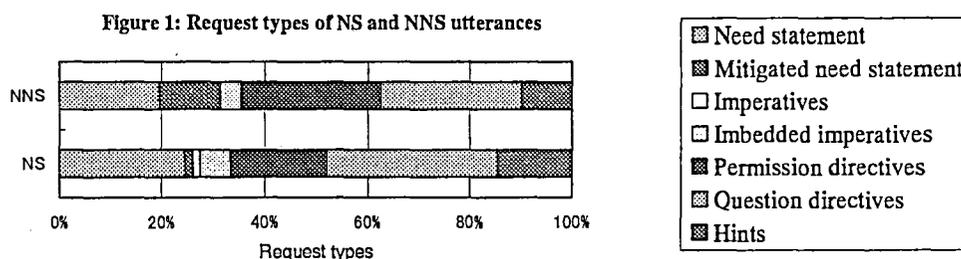
3. Grounder – "I missed class yesterday, could I borrow your notes?"
4. Sweetener – "You have beautiful handwriting, would it be possible to borrow your notes?"
5. Disarmer – "Excuse me, I hope you don't think I'm being forward, but is there any chance of a lift home?"
6. Cost minimizer – "Pardon me, but could you give me a lift, if you're going my way, as I just missed the bus and there isn't another one for an hour."

これら2つの sequential interaction をもとに、教科書中の要求表現を分類した。

(3) 結果

1) 英語母語話者と非母語話者の要求タイプ別の発話出現率比較

教科書比較分析のための基礎データとして、大学の研究室という自然な場面での秘書に対する英語母語話者(n=69)と非母語話者(n=51)の要求方略の違いについて調査した Schmidt (1994)のデータを援用し、要求のタイプ別にグラフ化したものが次の Figure 1 である。



この結果から Schmidt (1994) は、英語母語話者の方が needs statement, question directives, hints を多用していることから、非母語話者よりもより間接的な要求表現を使用する傾向があること、非母語話者は mitigated need statement を多用すること、permission directives は非母語話者の方が多用しているが、非母語話者は "Can I?" という表現のみを使用しているのに対し、母語話者は can, could, may など、より丁寧とされる表現を使用していること、などを指摘している。

2) ESL教科書(4冊)とEFL教科書(OC-A 9冊)中の request type 別の出現分布比較

ESL教科書およびEFL教科書中に表れた要求表現の分布を調査した結果は以下の表2の通りである。ESL教科書は Schmidt (1994)の分析結果を利用したものである。日本の OC-A教科書からは合計40例の要求表現が抽出された。その一つひとつを先述の directive types 別に分類し、それぞれのタイプに1回以上の用例があるかどうかを見たものである。

表2 ESL教科書とEFL教科書中の request type 別の出現分布比較 (*40例中の有無)

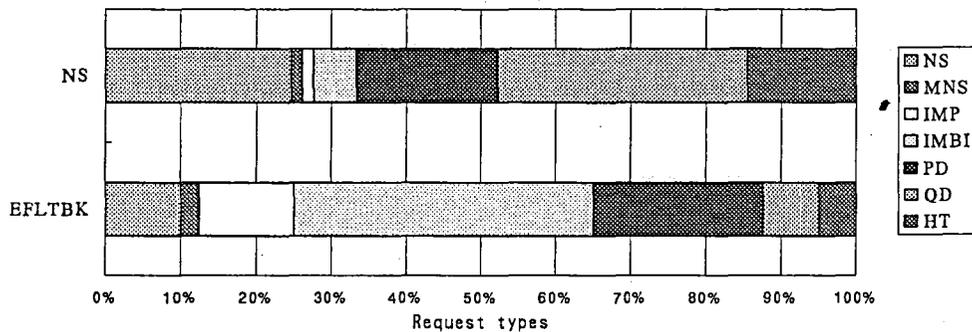
Request type / Textbook	ESL-1	ESL-2	ESL-3	ESL-4	EFL*
Need statement	-	○	○	-	○
Mitigated need statement	-	○	○	○	○
Imperatives	○	○	○	○	○
Imbedded imperatives	○	○	○	○	○
Permission directives	-	○	○	○	○
Question directives	-	-	○	-	○
Hints	-	-	○	○	○

この結果から、ESL 教科書は必ずしも最適のモデルと言えないことがわかる。調査対象資料はいずれも世界的に大きな市場普及率を持つ教科書であるが、限定された要求表現しか提示されておらず、特に question directive は1種類の教科書しか提示していない。これに対して、EFL 教科書は9冊を総合した結果ではあるが、すべての要求表現のタイプが扱われている。

3) 自然な会話(NS)と EFL 教科書(OC-A)の request type 別の出現比率比較

自然な会話と比較して、教科書の用例は明らかに imbedded imperative(Can I ~?など)が突出して多く(40%)、ほかにも permission directives (22.5%)と'Please +命令文'を含めた imperative も高い比率(12.5%)で出現している。それに対して、needs statement, question directive, hints のような間接的要求表現は母語話者の発話に多く、教科書には比較的少ない。(Figure 2)

Figure 2: Request types in NS utterances and EFL textbooks



4) EFL 教科書(OC-A)中の external modification の出現頻度

全教科書を合計して external modification は8例しか出ておらず、教科書中の要求表現が直接的であることを裏付けている。以下は教科書中の例である。

Would you do me a favor? (getting a precommitment) ... I have to write an English report. (grounder)

Would you help me?

I don't feel like doing that. (grounder) I want to go to the beach.

Wow! That's more than I can drink. (grounder) Give me a medium.

Oh, I've been waiting for it. Could you open it for me? My hands are wet. (grounder)

I'm new here. (grounder) Could you tell me the way to the post office?

We're rehearsing West Side Story (grounder) ... Can you help me?

Well, actually, I'm leaving in a few minutes. (grounder) Could I leave a message, Mrs. Hill?

If I pay you cash, (cost minimizer) can I get a discount?

上記の例のうち、要求をする理由付けとしての grounder に集中しており、checking on availability, sweetener, disarmer などは1度も表れない。

(4) 考察

今回の分析を通して、EFL の教科書においては、母語話者による実際の言語使用データとは異なる分布や頻度で用例を示していることが明らかになった。さらに、英語母語話者によって作成された ESL 教科書が、意外にも現実の言語使用を反映していないこともわかった。要求表現が OC-A 教科書中で最も頻繁に出現する speech act であることを考えれば、学習者の語用論的能力の養成に、あるいは語用論的意識(pragmatic awareness)の涵養に資するためには、より現実に近い用

例を提示し、メタ語用論知識の説明に役立つ機会を教科書中に含めていくことが求められる。ただし、これは教科書中の頻度が自然なデータと同一であるべきとする量的な指摘ではなく、あくまで EFL という環境において学習者による気づきや教授上の提示の可能性を広げるための質的改善への指摘である。母語話者との語用論的能力を持つことを目標とするかどうかはそれぞれの学習者のニーズによる選択に任されるものであるが、語用論知識あるいは意識の拡大により、異文化理解場面において無意識のうちに相手に誤解や不快感を与えたり、相手から誤解を受ける可能性は減少するであろう。

このような偏った要求表現に至った背景として、まず、現実の言語使用データを基礎としていないことがあげられる。教材作成者は、英語母語話者の直観データが実際の言語使用を反映しているとは言えないことを踏まえた上で、教材開発にあたる必要があるであろう。次に、言語材料中心の教材編成が理由として挙げられる。丁寧度の説明にはよく法助動詞 can/could などの区別が用いられるが、文法的説明とそれに伴う丁寧度の説明のために利用され、pragmalinguistic なレベルは意識しても、言語使用者としての視点、すなわち相手との人間関係や場面・状況を考慮してどのような表現を使用することが適切であるかという社会文化的な規範にかかわる sociopragmatic なレベルでの指導に結びつけにくい。一因として、教科書に表れた場面・状況設定の中での対人関係が社会的力関係、社会的距離において友人同士のように同等の相手との画一的な関係に終始しており、また、要求表現においても相手に心理的負担を感じさせるような要求はほとんど出現しないことが考えられる（深沢 2000）。語用論的意識を培うためにも、多様な人間関係や要求のタイプが提示されることが望ましく、そのためにはまず、英語母語話者の自然な対話を分析したデータに基づく研究データの蓄積が急務である。

4 結論

本研究を通して、教材作成者の言語的直観に基づく教材と実際の言語使用データには隔たりがあることが結果として明らかとなった。Wolfson (1989)が指摘するように、母語話者の社会言語学的直観は規範に基づくもので必ずしも現実の使用に基づいたものとは言えない。さらに、教室という場面は metalinguistic awareness は多く養成されるが、metapragmatic awareness の養成の機会としては不十分である。たとえば、Ellis (1992) が指摘するように、教師中心の教室場面では生徒が要求表現を使う場面は限定されている。そこで、教材に表れた要求表現やその場面・状況の理解を通して、noticing の機会としての、あるいは明示的な教授を支えるための手がかりとしての教材の役割にさらに注目していかなければならない。80年代以降の社会言語学、あるいは異文化語用論研究の蓄積により、ほとんどの speech acts において英語を中心に利用できるデータが収集されており、今後の教材開発に活用されることが期待される。

本論は要求表現、および非常に限られた量の教科書分析の結果であり、このほかの speech acts についてより多種類の教材と現実の使用との比較研究を進めていくことは、今後の課題としたい。

参考文献

- Bardovi-Harlig, K. (1999). Exploring the interlanguage of interlanguage pragmatics: A research agenda for acquisitional pragmatics. *Language Learning*, 49, 677-713.
- Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (Eds.) (1989). *Cross-cultural pragmatics: requests and apologies*. Ablex.
- Blum-Kulka, S. & Olshtain, E. (1984). Requests and apologies: a cross cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, 196-213.

- Cohen, A. (1996) Speech acts. In McKay, S. L. & Hornberger, N. H. (Eds.), *Sociolinguistics and language teaching* (pp. 383-420). Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (1992). Learning to communicate in the classroom. *SSLA*, 14, 1-23.
- Fukushima, S. (1990). Offers and requests: performance by Japanese learners of English. *World Englishes*, 9, 317-325.
- Fukushima, S. & Iwata, Y. (1985). Politeness in English. *JALT Journal*, 7, 1-14.
- Gass, S. & Selinker, L. (2001). *Second language acquisition: An introductory course*. London: Lawrence Erlbaum.
- Hill, T. (1997). *The development of pragmatic competence in an EFL context*. Unpublished doctoral dissertation.
- Hill, B., Ide, Ikuta, S., Kawasaki, A. & Ogino T. (1986). Universals in linguistic politeness: quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics*, 10, 347-371.
- Judd, E. L. (1999). Some issues in the teaching of pragmatic competence. In Hinkel, E. (Ed.) *Culture in second language teaching and learning* (pp. 152-166). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasper, G. (1997). Can pragmatic competence be taught? Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii.
- Kasper, G. (2000). Data collection in pragmatics research. In Spencer-Oatey, H. (Ed.) *Culturally speaking* (pp. 316-341). London: Continuum.
- Kasper, G. & Schmidt, D. (1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. *SSLA*, 18, 149-169.
- Kitao, K. (1990). A study of Japanese and American perceptions of politeness in requests. *Doshisha Studies in English*. 50, 178-210.
- Meier, A. (1997). Teaching the universals of politeness. *ELTJ*, 51, 21-28.
- Niki, H. & Tajika, H. (1994). Asking for permission vs. making requests: strategies chosen by Japanese speakers of English. *Pragmatics and Language Learning*, 5, 110-124.
- Olshain, E. & Cohen, A. (1990). The learning of complex speech act behavior. *TESL Canada Journal*, 7, 45-65.
- Schmidt, T. (1994). Authenticity in ESL: a study of requests. MA research paper. Southern Illinois University.
- Scotton, C. & Bernsten, J. (1988). Natural conversations as a model for textbook. *Applied Linguistics*, 9, 372-384.
- Takahashi, S. (1996). Pragmatic transferability. *SSLA*, 18, 189-223.
- Takahashi, S. & Dufon, M. A. (1989). Cross-linguistic influence in indirectness: The case of English directives performed by native Japanese speakers. Unpublished manuscript, Department of English as a Second Language, University of Hawaii at Manoa.
- Tanaka, N. (1988). Politeness: some problems for Japanese speakers of English. *JALT Journal*, 9, 81-102.
- Tanaka, S. & Kawade, S. (1982). Politeness strategies and second language acquisition. *SSLA*, 5, 18-33.
- Wall, A. P. (1990). Saying in naturally. *Pragmatics and Language Learning*, 1, 67-82.
- White, R. (1993). Saying please: pragmalinguistic failure in English interaction. *ELTJ*, 47, 193-202.
- Wolfson, N. (1989). *Perspectives: sociolinguistics and TESOL*. Newbury House.
- 鶴田庸子、ポール・ロシター、ティム・クルトン (1988) 『英語のソーシャルスキル』大修館書店。
 深沢清治 (2000) 「Pragmatic sensitivityを育てる教材開発への示唆的研究」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 30, 229-234.